

令和七年度

一般選抜第二期 入学試験問題

国語

注意

- (1) 解答用紙に受験番号、氏名を記入すること。
- (2) 解答用紙は、鉛筆で記入してさしつかえない。
- (3) 解答は、解答欄に記入すること。
- (4) 下書きには、問題用紙の余白を使用すること。
- (5) 解答用紙は、一枚しか配付しない。
- (6) 試験終了後、解答用紙および問題用紙を持ち帰らないこと。

問題一

次の1～6の問いに答えなさい。

1 次の①～⑤の傍線部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 胸襟を開いて話し合う。 ② 相手の魂胆を暴く。
- ③ これが脆弱性の原因である。 ④ 自分の手柄だと吹聴する。
- ⑤ ずいぶんと偏狭な考えだ。

2 次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字になおして書きなさい。

- ① 彼のキョシユウに注目が集まる。 ② 盗みのケンギをかけられる。
- ③ 彼の家族とコンイにしている。 ④ 仕事にボウサツされる。
- ⑤ すべての可能性をモウラする。

3 次の①～⑤の慣用句の空欄に入る適語を後から選び、その記号を書きなさい。

- ① 馬脚を() ② 愁眉を() ③ 惰眠を() ④ 破綻を() ⑤ 耳目を()
- ア むさぼる イ 集める ウ 折る エ あらわす オ そばだてる
- カ 休める キ きたす ク 開く

4 次の①～⑤の外来語の意味として適するものを後から選び、その記号を書きなさい。

- ① タブー ② ダイナミズム ③ コンセプト ④ オーソドックス ⑤ アフォリズム
- ア 禁忌 イ 概念 ウ 警句 エ 活力 オ 正統的

5 次の①～⑤の文の傍線部の敬語の種類を後から選び、その記号を書きなさい。

- ① 私は紅茶をいただきます。 ② ご注文は何になさいますか。 ③ 机の上に置いておきます。
- ④ お客様は明日お越しになる予定です。 ⑤ 先生にはご健勝のことと存じます。

ア 尊敬 イ 謙讓 ウ 丁寧

6 次の①～⑤の四字熟語の空欄に入る適する漢字を書きなさい。また、意味として適するものをそれぞれ選び、その記号を書きなさい。

- ① () 葉末節 ア 役に立たない事柄 イ 主要でない事柄
- ウ 消えて行く事柄 エ 将来性のある事柄
- ② () 小棒大 ア 威力が強大であること イ 互いに相性がいいこと
- ウ 徐々に成長すること エ 物事を大げさに言うこと
- ③ () 面楚歌 ア 孤立無援になること イ 全員で合唱すること
- ウ 親友と別れること エ 昔を懐かしむこと



図1「ぼくもきみなんだ」(いわむらかずお『かんがえるカエルくん』福音館書店、より)

もしストーリーがここでおしまいになるのなら、ごく平凡な自他の視点の転換についての、いわば一種のたとえ話で終わってしまうことになる。だが絵本の中のカエルくんはもう一段、思考を飛躍させるのである。

すなわち「わたし」を中心として、「あなた」が決まる必然性が必ずしも存在しないということに、「チョウさん」を見て気づく。「わたし」というのは何やら、自己のからだに内在していて、「あなた」より確からしいけれども、「あなた」抜きには「わたし」という意識もまた、霧散してしまうのではないか、という結論を暗示して、この絵本は終わりを迎えることとなる。

これは、今はやりの「自分らしくありたい」とか、古い表現だと「自己実現」ということを考える上で、たいへん示唆に富んだメッセージを送っている。「自分らしくありたい」とは、例えば「本当に自分がやりたいこと、本当に自分が好きなこと」を見つけて、そこへ没頭するようなイメージと結びついている。だが『かんがえるカエルくん』は、「自分の好きなこと」を、真に人間は自分ひとりで見つけたり、決めたりできるのかという問いに、大いなる疑念を呈し

するとネズミくんは、彼の立場から、カエルくんだって「きみ」なのに、自分では「ぼく」呼ばわりしている事実を指摘する。そこでカエルくんは、はたと思いついた。(図1)

「きみ」というのが、主体から見た、他者の存在の表現方法であることを認識する。同時に、他者もまた、主体性を自分と同等に確保していることを知る。だから他者が主体的に、主体を他者として把握して表現するならば、「ぼく」は「きみ」と呼びかけられることを理解するにいたる。他者の立場に立つと、「ぼく」も、「ぼく」にとつての「きみ」と同じなのであり、個々人は自己中心的に他者の存在やこころを理解

しているということの、相対的関係を知るのだ。

一冊の本が三つのテーマで構成されている。一つめは「かお」についての話題で、個々人の相貌というものを通して、「気持ち」とは何かを思索していく。次に「そら」について考察をめぐらし、からだの内側と外側の関係を論ずる。それから最後に、ここに紹介する「ぼく」とは何かを「かんがえる」にいたる。

まずカエルくんは「自分は『ぼく』なのに、どうしてネズミくんも『ぼく』なのか」ということに疑問を感じる。カエルくん自身は、ネズミくんを「きみ」と呼ぶのに、なぜネズミくんはネズミくん自身を「ぼく」と表現するのかわからない。

問題二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

- ④ () 謀遠慮
- ア よく考え先を見通すこと イ 深く考え身を引くこと
- ウ 損得を考え辞退すること エ 何も考えず突き進むこと
- ⑤ () 三暮四
- ア すぐ命令が変わり信頼できないこと イ 一生健康に暮らしていくこと
- ウ 明日には利益が増えていること エ 人をうまくだましごまかすこと

てくれている。

私たちは、自分という存在の中に出発点から、周囲から期待される姿をかなりの程度、とり込んで暮らしているようなのだ。そうである以上、自己実現とは思いのほか、他人の期待にこたえることと合致するかもしれないという帰結に到達してしまう。

それを本人が感じないのは、一連のプロセスが当事者の自覚を伴わず進行していくからにすぎない。「自分はこんなに、ひとりで思いめぐらして工夫したつもり」が、ふたをあけてみれば「なあんだ、やっぱりああなるんだ」ということは決して珍しくない。

もっとも、このように書くことで私は、自己実現を達成すべく意気さかんである人を、揶揄したり水を差そうとするつもりは毛頭ない。そうではなくて、逆にどうして二一世紀のハイテク社会という、いわば一種の万能社会において、^②「自分探し」が流行するのかということについての解答の糸口を見出そうとしてのことなのである。

前述の論理に従うならば、「自分のしたいことがわからない」あるいは、「自分とは誰なのかわからない」という悩みは結局のところ、「自分は何をすべきである」と社会から求められているのかわからない」あるいは「自分を社会はどう見ているのか不明である」ということと、同義になってしまうからである。

むしろ親が自分をどう見ているか、何を望んでいるかは明確だろう。しかし「自分探し」にまつわる悩みは、それでは解決がつかない。というのも、社会的自立に関して、一個人として、どう社会に出ていくかが不明なのであって、それは親離れの仕方への暗中模索とも表現できる。つまり、親子の外の世界において、「私はどう見られているのか」のフィードバックを、今の世代は得にくくなっているからではないかという推測が成り立つのである。

だからこそ、価値や規範というものが失われ、やみくもなブランドへの追従が流布する状況が生じてきているのだろう。そしてその背景に、ケータイの普及に代表される社会のIT化の影響が潜んでいるのだとすれば、すなわち社会の高度情報化は私たちが自分が社会においてどう認識されているかを見えにくくする環境を提供しているという結論にいたる。

(中略)

ケータイの特徴の一つが、^③個々人のいる空間の隔たりを飛びこえて人々を結びつけるという点にあることは言うまでもない。確かにそれは、通信手段としては過去にない利便性を備えている。端的にIT化によって、私たちの「自分」というものは身体の輪郭を超えて、外界へ大きく拡張されてしまった。地球の裏側の他者に対してまでも、すぐそこまで行って会話しているかのような感覚を抱く。しかし自己の拡張は反面、自他の区分の境界を非常に曖昧なものにしてしまっている。生物としての人間の自己意識をはじめとする高次の社会認知発達は、空間的に同所にいる仲間がまとまって生活し、自分と他人が明確に分離される認識を前提条件としているらしい。われわれは^④人と人が顔を突き合わせて過ごすのに多大な時間を割くことを、ラジオの発明以来、ないがしろにしすぎてきたツケを今、払わされようとしているのかもしれない。

(正高信男『考えないヒト』)

問一 傍線部①「高等な中身」ということの具体的表現を文中から十五字以内で抜き出さない。

問二 波線部A～Fの語はそれぞれ「ネズミくん」「カエルくん」のどちらのことを指すか。「ネズミくん」は⑦「カエルくん」は④、とその記号を書きなさい。

問三 傍線部②「『自分探し』が流行する」理由を文中の語句を使って六十字以内で書きなさい。

問四 傍線部③「個々人のいる空間の隔たりを飛びこえて人々を結びつける」とほぼ同意の表現を文中から五字で抜き出しなさい。

問五 傍線部④「人と人が顔をつき合わせて過ごす」ことが大切である理由を三十字以内で書きなさい。

問題二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

読書の思い出を語ろうとして記憶を遡って行くと、幼時の環境が脳裡に浮かんでくる。家がカフェーと呼ばれる種類の飲み屋であったので、物心ついたときは女性の真只中にいた。本州の北端に近い地方都市の中心部にあたるいわば繁華街の、通りに面した家の二階の一隅に女給部屋（とそう呼んでいた部屋）があつて、子供のわたしは階下の住居からよくそこへ遊びに行った。女の人たちは、一方がガラス窓になっていて、冬季の昼間は陽光が、隣家の屋根の雪に反射したり、軒端から並んで下がっている太い氷柱の列を透って入ってくる八畳の部屋で、炬燵に向かって背を丸めたり足を突込んで腹這いになったり肘枕の横向きになっていたりするおもしろいおもしろい恰好で、婦人雑誌や大衆雑誌や、菊池寛、小島政二郎、竹田敏彦などの恋愛小説に読み耽っていることがあつた。どういふきっかけからであつたのか、わたしは小学校へ入るまえから平仮名を読むことができ、それにたぶん当時の本にはルビが振られていたからであつたのだろう、漢字もあまり気にならなかつたので、彼女たちから借りて読むそれらの本や雑誌が、最初の愛読書となつた。（中略）

母親が水商売をしていたのは、地方の新聞記者だつた父親が、五人の子供の末っ子であるわたしがいまだ一歳にもならないうちに死んでしまつたからで、熱心に本を読み始めた国民学校二、三年のころ残されていた父の僅かばかりの蔵書のなかに、^A菊池寛の短篇集があり、なかでも『忠直卿行状記』と『入れ札』に、いまでも鮮明に覚えているほどの強烈な印象をうけた。それが、国民学校三年のとき、と判るのは、あまりに感銘が強烈であつたため本を親友のK君に貸したところ、そのことが先生に知られて「こういう本を読むのはまだ早すぎる」と注意されたことがあつたと、K君が四年になるとき転校して行つたからである。

後年の母親の話によると、肺を病んでいて大酒飲みだつた父親は、^{注1}癪癖が強く、飲み始めるとたいいてい鬱憤が胸底から込み上げてくる様子で、こわくて側に寄れないほどであつたという。それを聞いたとき菊池寛の描いた忠直卿をおもしろ出した。初めて本で読んだときも、無間地獄のような忠直卿の孤独感が判つたような気がして、おそろしさに身ぶるいした。それにも増してよく判つたような気がしたのは、『入れ札』で自分の名前を「くろすけ」と書いた半端なやくざの子分の心持だつた。自分の札が一枚しかなかったときの九郎助の心中を考えると、子供ながら荒涼とした寂寥感に襲われて^②身を切られるようなおもひがした。自分を半端者のようにおもつて僻みたがるわたしの宿痾は、^{注2}このころから兆していたものようだ。国民学校に入つた年に始まつた大東亜戦争の激化とともに強まっていた水商売に対する世間の白眼視と、それにこちらの引け目とも無縁ではなかつたのかも知れない。警察からのお達しによつて水商売の営業が差し止められたときには、親の心配をよそに、^③ほつとした気分になつた。

店の女の人たちから本を借りて読むことに始まつた早熟の読書傾向は、その後も続いていて、小学生のくせに市立の図書館に本を借りに行つて断られ、そのことが学校に連絡されて、またもや叱責に近い注意をうけたりしたこともあつたが、一方においては、ご多分にもれず山中峯太郎、南洋一郎、高垣眸、佐藤紅緑といった人たちの^④本に熱中していた。家では本を買つて貰えなかつたので、古本屋の子供のT君や、家が裕福なF君に借りて読んだ。本を借りると、ずっと道を歩きながら二宮金次郎の姿勢で読み続けて家に帰り、そのまま階段を登つて商売をやめてから無人になつていたかつての女給部屋に入る。気がつくとき、あたりは薄暗くなっている。いつも残り少なくなつていく頁の薄さが惜しくて、（ああ、もうあとこれだけしかない……）と舌打ちしたいようなおもひに駆られ、いくら読んでも

なくならない本はないものだろうか、とおもっていたそのころの気持ちには、だれにでも経験のあることだろうが、友達から一冊か二冊ずつ借りて来る本であるだけにその感覚は切実であった。

(中略)

自分もいずれ死地に向かうつもりでいた戦争が終って世の中は急激に一変した。日本は文化国家に生まれかわるのだと教えられて、それまでの予科練や少年戦車兵にかわる将来の目標として意識するようになったのは、父親が生前やっていたという新聞記者だった。兵隊から復員して来て放送局の技術関係の仕事についた次兄は、二階の客座敷だった部屋のひとつの壁いっぱいを造りつけの書棚にして、そこへ買って来た古本や新本を次次に並べ始めた。いちばんおかげをこうむったのは昭和十七年に出版された改造社版の佐野繁次郎装幀による「新日本文学全集」で、現代の日本の小説に関するわたしの基本的な意識は、この全集によって形づくられている。もっとも親近感を覚えたのは「井伏鱒二集」で『さゝなみ軍記』『多甚古村』『多甚古村補遺』『ジョン万次郎漂流記』『鯉』『山椒魚』『槌ツア』と「九郎治ツアン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること』『掬摸の棧三郎』『へんろう宿』という内容であった。『多甚古村』を読みながら、主人公の巡査の姿に、戦争で死んだ兄の姿を重ね合わせていたようだ。下宿から送られて来た学生時代のアルバムのなかに、クラスの人たちと演じた芝居で巡査に扮した兄の写真が貼られていたからである。また偶然の一致であったのか、あるいはまた意識下の必然の働きによるものであったのか、日本の文学の多様な味わいのなかでも、内田百閒、井伏鱒二^B、そしてのちには木山捷平と、いずれも瀬戸内海の沿岸に生まれた人たちの飄飄としたユーモアを好むようになった。ほかに好きになったのは、嘉村礒多、牧野信一、上林暁といった人たちで、どこことなくマイナーで地方的な感じと私小説系統の作家に対する好みも、そのころからのものであったようだ。このほか、次兄の書棚から引抜いた本で印象が強かったのは、パール・バックの『大地』^Cと谷崎潤一郎の『細雪』で、この二つの長編には小説というものの面白さを堪能させられた。

^D 太宰治は、新制中学の二年のときに、死のニュースが新聞に載るまで知らなかった。学校新聞の編集をするための部屋に入って行ったら、新聞部の顧問の若い先生が、「ダザイが死んだ」と青い顔をしていて、「ダザイって、だれですバ？」と訊ねると、「いまの日本でいちばん偉い小説家だ。この青森県から出た人だ」といった。その日、学校からの帰りに古本屋で買い求めて、初めて読んだ太宰の作品は『お伽草紙』だった。したがってわたしにはいまもって、太宰が『人間失格』のニヒルで暗鬱な作家であるというより、文章と語り口が抜群に面白く、明るくユーモラスで、読者を楽しませるために身も心も磨り減らした人だという印象のほうが強い。おなじ津軽の出身ということではない、石坂洋次郎の『青い山脈』には、主人公の男女の自由な交際ぶりに憧れと共感を覚えて戦後の解放感を満喫した気分になり、『石中先生行状記』も作中の世界と地続きのような環境のなかで大いに楽しんだ。

注1 癩癖：怒りっぽい性質

(長部日出雄「観客席と現実のあいだ」)

注2 宿痾：長く治らない病氣

問一 傍線部①「物心ついた」②「身を切られるようなおもい」を使ってそれぞれ三十字以内の短文を作りなさい。

問二 傍線部③「ほっとした気分になった」のはなぜか、その心情を五十字以内で書きなさい。

問三 傍線部④筆者が「本に熱中していた」ことがよくわかる表現を文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

問四 波線部A「菊池寛」B「井伏鱒二」C「谷崎潤一郎」D「太宰治」の各作家と関係が深いものを後から二つずつ選び、その記号を書きなさい。

ア	新思潮派	イ	無頼派	ウ	新興芸術派	エ	耽美派	オ	白樺派
カ	永井荷風	キ	坂口安吾	ク	芥川龍之介	ケ	梶井基次郎	コ	尾崎紅葉